

1 尊敬が差別に変わる ～人々は、なぜ庭師や能楽師<sup>のうがくし</sup>たちを差別したのか～

室町時代の人々は、地震や洪水、火山の噴火などの天変地異、死や病気、出産、犯罪、火事など、人間の力ではどうしようもないことを大変おそれていました。また、自然界には霊(れい)がいると信じられ、大きな木や石を動かすこともたたりなどとおそれられていました。

しかし、人々が生活する中では、そのようなことは必ず起こります。人や動物の生死や自然に関わって生活している人々もいました。例えば、死んだ牛や馬を処分したり、庭をつくるために石や木を運んだりしました。これらの仕事は、命を最後まで大事に扱ったり、自然に手を加えてみんなの生活を豊かにしたりするために、誰かがしなければならぬ大事な仕事でした。

室町時代の人々は、始めは彼らを「自分たちにはできないことができる人々だ」と尊敬していました。しかし、しだいに「自分たちがおそれているものにふれることができる、ふしぎな力をもつ人」「自分たちとはちがう暮らしをしている人」として見るようになり、「食事やつきあいをしたくない。」と差別するようになりました。

自然のものを生かしてすばらしい庭園をつくる庭師たちを、「何か特別な能力をもっているのでは…」と誤って思ってしまったのです。例えるなら、最初は「わー、すごい人たちだ。」と見ていたのが、しだいに「自分たちとはちがう。関わらないようにしよう。」となっていったのです。

こうした人々が担(にな)った仕事は様々ですが、主に次のようなものがあります。

町の清掃・葬儀<sup>そうぎ</sup>・壁ぬり・井戸ほり・庭づくり・皮革<sup>ひかく</sup>製造 (※動物の皮から何かをつくる仕事)・肉や魚の販売・竹細工・はき物づくり・武具づくり・運送・渡し舟・  
刑罰<sup>けいばつ</sup>・猿楽<sup>さるがく</sup>・能楽<sup>のうがく</sup>などの芸能

2 能楽師<sup>のうがくし</sup>の世阿弥<sup>ぜあみ</sup>が書いた本から ～庭師たちは、なぜすぐれた技術をもっていたのか～

われわれは、今、人々から愛されてよい生活ができて、もしその芸<sup>あ</sup>に飽きられたらおしまいになる。だから、芸を習い始めたころの素直で真剣な気持ちを忘れず、常に努力することが大切だ。

庭師や能楽師らは、人気がなくなり仕事の依頼が来なければ、食べることもできなくなります。彼らは、自分の技術を高めるために、差別に負けず、工夫と努力を重ね続けました。その結果、世界にはほこれる能や庭園を生み出したのです。

※ 今もよく使われる「初心 忘るべからず」は、世阿弥<sup>ぜあみ</sup>がこの本に書いた言葉です。

